

# カンキツヒメヨコバイの加害によるダイズの矮化症状

○西野 実<sup>1</sup>・河野勝行<sup>2</sup>

<sup>1</sup>三重県農業研究所

<sup>2</sup>農研機構野菜花き研究部門

三重県のダイズにおいて、葉が湾曲、黄化し、節間の伸長が抑制されて矮化する症状が稀に観察される。2014年には、三重県北部のダイズほ場3haではほ場全面に上記の症状が確認された。この症状の原因は不明であったが、2013年に三重県中部のダイズほ場で同様の症状が発生した際、カンキツヒメヨコバイの多発生が確認されていたことから、この症状がカンキツヒメヨコバイの加害によって発生することが疑われたので、その検証試験を行った。

まず、実験室内でポット栽培したダイズにカンキツヒメヨコバイを放虫して症状の再現試験を行った。供試したカンキツヒメヨコバイは2014年に県北部の症状発生ほ場から採集した個体群を用い、播種12日後に4株あたり成虫6頭を放虫し、対照として無放虫区を設けた。25℃、16L8Dで17日間栽培したところ、カンキツヒメヨコバイ放虫区では、無放虫区と比較して放虫後に伸長した節間が抑制される傾向が認められた。また、葉の展開速度も抑制される傾向が認められた。

次に、カンキツヒメヨコバイの加害によるダイズの矮化がウイルス等の感染によるものか、吸汁によるものかどうかの検証試験を行った。ポット栽培したダイズにカンキツヒメヨコバイ成虫を放虫して試験期間中(37日間)1頭/株を維持した「放虫区」と試験期間の途中(放虫17日後)で成虫を除去した「放虫-除去区」と、放虫しない「無放虫区」を設けた。供試したカンキツヒメヨコバイは研究所内のダイズから採集した個体群を用いた。その結果、放虫区では放虫以降に伸長した節間や葉柄は、無放虫区にくらべて抑制される傾向が認められた。放虫-除去区では放虫している期間に伸長した節間や葉柄は無放虫区にくらべて抑制される傾向が認められたが、除去後に伸長した節間や葉柄については無放虫区と差が認められなかった。また、本種の繁殖が認められた株では幼虫の加害により葉の湾曲等の症状も確認された。

以上のことから、ウイルス等の感染ではなく、カンキツヒメヨコバイの吸汁そのものにより節間長や葉柄長が抑制され株全体が矮化することが確認された。これまで、本種によるダイズの被害の報告はなかったが、今回の結果から、ダイズでカンキツヒメヨコバイが多発することで矮化等の被害が発生する可能性があることと示唆された。

Dwarfing symptom of the soybean caused by feeding of citrus leafhopper *Apheliona ferruginea*

Minoru Nishino<sup>1</sup>・Katsuyuki Kohno<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Mie Prefecture Agricultural Research Institute

<sup>2</sup>Institute of Vegetable and Floriculture Science, NARO